

[18] 舞踊のドンファン

ミハイル・バリシニコフの挑戦と征服

1992年8月21日 東京新聞 夕刊

● ナイフとしての肉体

ふつう人が頭で考え、言葉で表すのと同じことを、肉体が掘り下げ、表現することがある。それも頭で考えたことを肉体によって形にする、というのではなくて、肉体そのものが、あたかも削岩機のように、みずからの存在の可能性を、その深みを、切り開いていく、そんなふうに感じられることがあるのだ。

そういう時、肉体はそれ自体が光ほとばしるナイフでもあるかのように、与えられた課題、立ちはだかる壁へと向かっていく。舞踊が科学のように明晰になり、哲学のように深遠になるのは、こうした瞬間である。肉体と椅神が完全に一体化したと感じられるのも、こうした醜聞である。それにくらべれば、ただの思考、ただの言葉は、なんと薄っぺらで、重みのないものだろうか。

ミハイル・バリシニコフが旧ソ連から西側に亡命したとき、人々は、伝統あるキエフ・バレエによって徹底的にきたえられた類いまれなテクニシャンとして、あたかも貴重な珍獣を迎えるように、彼を歓迎したものだ。

● 絶えず裏切る

しかし、その期待は裏切られた。といっても、彼が完璧なテクニクを見せなかったからではない。パリシニコフのバレエ・テクニクは、垂前絶後といってもオーバーではないはどのものだったし、案にたがわず、熱狂的なミーシャ旋風を巻き起こしたのだけれども、しかしそれは彼自身の深い志とはちがっていた。彼自身の関心、その舞踊の本質は、すでに体得した技術を見せることにあるのではなく、

[18] 舞踊のドンファン

ミハイル・バリシニコフの挑戦と征服

1992年8月21日 東京新聞 夕刊

その技術をもとに、たえず新たなるものに挑戦することにあつたからだ。

バリシニコフの踊る肉体は、数学者の頭脳を思わせる。解いたことのない問題を前にして、才能ある数学者がふるいたつように、いまだかつて踊ったことのない動きにたいして彼の肉体は挑戦し、これを乗り越えずにいられないのである。

あるいはまた、舞踊のドン・ファンだといつてもいい。女とみれば征服しないではいられないように、自分に踊れない踊りがこの世に存在することが許せないのだ。自分が踊ったらどうなるか、それを思うと、彼の心はひそかな期待におののくのだろう。

パリシニコフの踊りはだから、数学者と同じく、かつまたドン・ファンと同じく、どこまでも醒めていて、しかも熱狂的である。そして、いいしれず官能的である。

そのようにしてバリシニコフは、二十世紀の並いる新進振付家を乗り越えてきた。しかも、ただ征服して通りすぎるだけではなく、それら新しい振付家の作品の意味を明解にときほぐし、彼らを、いわば格上げしてきたのである。もしバリシニコフとの出会いがなかったなら、たとえばトワイラ・サーブの作品がパリ・オペラ座バレエの演目になることはなかっただろう。

しかし、そういう私自身の今の本音を言えば、もう一度バリシニコフが踊るのを見ることができてよかった、ただそれにつきる。